空虚な瞳に写るモノ

飽きっぽいニート志望

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日世界に蔓延した病、虚蝉病（うつせみびょう）。

これはそれに感染した青年の、狂った物語の始まりの1ページ。

※連載予定だったが個人的に欝過ぎて書けなくなったもの……の短編版。

※つまりは出来損ないを投稿しただけである。

目　次

空虚な瞳に写るモノ ―――― 1

空虚な瞳に写るモノ

虚蝉病。この世界では三年前から感染が拡大し始めた病だ。
感染すると数年の潜伏期間を経て身体のどこかにカウンターが現れる。
その数字は必ず７から始まり、ＡＭ０：００を越えるごとに減っていき、カウンターが０になると死ぬ。最悪の病だ。
しかしこれには１つだけメリットがあった。
虚蝉病患者は、カウンターが現れて以降人間を超越した力を振るうことができる。
一瞬の使用で大規模な火災を起こせる発火能力、ひとたび使えば都市昨日を麻痺させる発電能力、周囲一帯の全てを完全に凍てつかせる冷凍能力、触れるもの全てを腐らせる腐敗能力など、どれもこれも凄まじい、まさに超越者のごとき力である。
……だが、その力に気付く者は案外少ない。
政府が情報を隠蔽しているのだ。
知ったものはたとえ誰であっても殺し、能力の存在を気付かせない。
虚蝉病患者たちがもしそれを知ってしまえば、どうなるかが分かっているからだ。
残りの寿命は短いのだからと、悪事に手を染め混乱を起こす者、少しでも道連れにしようと殺戮する者、やりたかった事全てを力付くでなそうとする者……そんな者たちが大量に現れ、なおかつその者たちは皆人類を超越した力を持っている。
そんな状況になってしまえば、待っているのは破滅だけである。
患者たちによる破壊、患者同士の争いの余波、それを止めようとする大国のミサイル攻撃……たちまち国土は崩壊し、地図上から消滅するだろう。
だから政府は隠すのだ。患者たちの能力を。人間には過ぎた力を。
……さて、所変わって、ここは東京都Ａ区Ｎ井町。

ここに今、新たな患者が生まれていた。
彼の名は斎藤和也。まだ先も長い、１８の高校生である。
しかしそんな彼に訪れたのは、人生が残り7日であることを示すサイン。
現れたのはとても確認が容易な左手の甲であり、見逃すはずはなかった。
「マジかよ……俺の人生は、あと7日だってのか？」
彼は、自室に閉じ籠り、ベッドの上で頭を抱えていた。
それもそうだろう。昨日まであったはずの未来が、突然消滅したのだから。
まるで元々無かったかのように。
しかも昨日まで仲が良かったはずの友人たちも、自分が虚蝉病に感染するのを恐れてか避けるようになった。
「ふざけんなよ……クソがぁぁぁぁぁ!!!」
不意に今日学校で言われた一言を思い出し、和也は激昂する。
『近付くんじゃねぇよ、汚物』
これを言った男は、元々口が悪いクラスメイトではあったが今日の物は酷かった。
暴力沙汰だけは起こさないようにしてきた和也も抑えきれなくなり、近くの椅子で殴りかかるほどの乱闘となった。
二人が、怪我をして病院に運ばれた。
しかし和也はどうせ1週間で死んでしまうのだからと解放され、家に返された。
だが……彼の中には、その怒りがまだ燻っていたのだ。
突然手のひらを返したような友人たちに、7日で死ぬという自分の運命に、自分を殺す病気そのものに。
彼は怒りのままに、部屋の壁を殴り付ける。
しかし頑丈な現代建築はびくともせず、ただ和也の拳を痛めつけた。
しかしそれでも殴るのをやめない。
拳の感覚が麻痺しているかのようだ。

行き場のない怒りを、ただ壁を殴ることで発散しようとする。緊急避難的な行動だろう。
しかしその怒りは収まらない。むしろ次第に増すばかりであり、それどころか更なる感情に変質してすらいた。
怒りから、憎しみへ。
憎しみから、狂気へ。
単純な怒りは死んでなお残りそうなほどの濃密な憎悪へ、憎悪は自らの心すら蝕み、狂気へ包んでいく。
次第に和也の壁を殴る拳は威力を増していく。
それはまだ一向に傷を付けることすら出来ていないが、彼はそれでも構わないとばかりに殴り続ける。
まるでこの世の全てが、目に写る何もかもが憎いかのように。
殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。
いつしか彼の拳は、壁に深い傷を付けていた。
そして、威力もすでに人間の繰り出せるそれとはとうにかけ離れていた。
しかしそれでも殴るのをやめない。
怒りは、憎しみは収まらない。
「クソが!クソが!クソがぁぁぁ!!!」
壁を殴りながら罵声を浴びせる姿はさながら狂人のよう。
否、すでに彼は狂っている。どうしようもないほどの怒りが、彼を狂わせている。
そして、彼が怒りのままに殴り続けた壁が崩壊した。
……刹那、和也の部屋から響く音が気になってやって来ていた野次馬たちが、一斉に死んだ。
彼の能力が発現したのだ。
それは、彼の憎しみを現すかの如くその瞳に写る全てを殺す力。
誰であっても関係ない。ただ写っただけで死ぬ。そういう力だ。
「あ……?……あぁ、そうか」
彼は、砕けた壁の前に立ち、息絶えた野次馬たちを見てある事に気

付いた。
自分の目に写った生物が死んでいるということに。
「アハハハハハハ！こりゃ良い！最高だ！みんな殺せるもんな！アハハハハハハ！」
彼は、狂ったように笑い出す。
憎くて堪らない、元友人たちの顔を思い浮かべながら。